

高等学校英語教育研究関係団体・組織の改善を目指して

平成17年度会長

会長当時・北海道札幌国際情報高等学校長

現在、北海道教育庁教育指導監

深澤 宗明

北海道の高等学校における英語教育関係の研究団体は、高英研、高教研英語部会、LL研、中高英研等等々があり、それぞれが、独自の目的と組織をもって研究活動を行っていたが、時代の変化や英語教員の意識の変化、また各組織の研究内容の類似性等により、参加者が限られたものとなっていた。このようなことから、時代の要請に対応できる研究内容等と広範な英語教員の参加が期待でき、財政基盤のしっかりした組織への再編が必要であるとの要請から、平成14年度、櫻田 顕高英研会長（元札幌国際情報高等学校長）から、研究団体等の組織を見直すプロジェクト設置の提案があり、平成15年度、それを引き継いだ樋口暉純会長（元札幌東陵高等学校長）、佐々木美喜雄会長（現室蘭栄高等学校長）の下、検討プロジェクトの設置と組織等の見直し案の取りまとめが開始された。

特に、以前から課題となっていた高英研の位置付けの明確化と、全道各地域における研究組織との関わり、また、一人でも多くの教員の参加が期待できる全道的研究組織の構築が大きな課題となった。

全道の英語の管理職が中心となり、全ての英語教員からの意見聴取や足掛け3年間にわたる粘り強い協議を経て、岡田義明会長（現札幌国際情報高等学校長）の下、平成18年度に高英研の位置付けの明確化、及び全道的研究組織の発足、さらに実践的研修を行う「場」の設定が決まり、現在、佐々木茂文会長（現札幌丘珠高等学校長）の下、新たな高英研の組織構築と参加促進に向けた取組が着実に進められている。今年度は新たな歩みを始める第一歩の年であり、周囲の期待も大きいことから、広範な英語教員が集い、実践を持ち寄って研修を行い、「与えられ、聞くだけの研究会」から「自分たちで創り上げていく研究会」へと脱皮して、生徒の日々の授業に還元できる研究活動の充実が進んでいることを示すことが期待されている。

なお、一連の流れに先立って、平成16年度にはLL研がCALLの配置などにより、当初の研究及び研修目的を果たしたことから活動を高英研に引き継ぎ、解散している。

さて、現在、英語教育に求められるものは、所謂「コミュニケーション能力」と「国語力」の育成だと考えている。特に、「コミュニケーション能力」については、近年採用される先生方の能力の高さやTOEIC等の普及が示すように、著しく前進しているが、他方「国語力」の育成については、必ずしも十分とは言えず、語学を教えるものとして、EFLとしての英語教育であることの意識を持った「コミュ

ニケーション能力」や「国語力」の育成が必要だと考えている。また、既に、全国各地で実践が行われているが、教員の日々の教育活動を支える授業について、具体的に教授法や教材・教具、また生徒とのかかわりについて研修をする機会や場が求められており、高英研が「研究大会」を設け、実践的な研修を予定していることは、時機を得たものであり、個々の先生方の資質の向上と生徒への還元を期待するものである。

時代の要請や生徒の状況等に応じて、諸先輩が工夫や改善を重ね、発展させてきた高等学校における英語研究活動は、また大きな一歩を踏み出すが、常に「生徒の視点」に立って、「実践的な研究活動」となるよう、全ての英語教員が手を携えて着実に歩むことが必要だと考えている。（平成 19 年 6 月）